

序
カルト
卜原論

カルトが日本を、蝕^{むしば}んでいる。

統一教会が自民党に深く深く喰^くい込んでいた実態が明らかになっている。

カルトはよくない。カルトにつけ込まれた自民党はもつとよくない。ありがちな感想だ。

これで結論が出たような気がして、気がゆるんでしまうと、カルトの思う壺^{つぼ}である。

大事なのは、カルトの正体を見届けて、カルトの息の根を止めるやり方を覚えること。そうすれば、カルトが今度また忍び寄って来ても、きっぱり片づけることができる。

日本人は、こういう訓練が足りない。ことに、政治家やジャーナリストや政府職員など、責任ある立場の人びとの訓練が足りない。そういった頼りない状態なので、一般の市井の人びと（ビジネスパーソンや、学生や、主婦や退職世代の人びとや…）もそれなりの知識と覚悟を身につけて、責任ある立場の人びとを監視し、盛り立てていく必要がある。

そもそもカルトをどう定義すればいいのか。カルトの何がいけないのか。カルトとそうでない宗教とのあいだに、どう線引きをすればいいのか。そういう基本のキのところ、あやふやなままではないだろうか。

というわけで、この「カルト原論」では、基本的な疑問を順にたどりながら、カルトの本質を考えていこう。

カルトは危険だ。でも、危険じゃないですよ、みたいな顔をして、社会に広がっていくことがよくある。家族が巻き込まれるかもしれない。危険なカルトを見分けて、正しく対応すること。それは、まともな社会人の大事な素養である。

Q1 カルトは、ふつうの宗教とどう違いますか？

まず、カルトに限らず、宗教とはどんなものか、理解しましょう。

宗教は、ウイルスみたいなものだと思います。

宗教とは、考え方です。考え方なので、ひとからひとに伝染します。伝染して、みなで同じことを考えましょう、というのが宗教です。

伝染するからいけないのか。そんなことはありません。みんなでいいことを考えましょう、なんです。宗教のおかげで、人びとの信頼が生まれ、連帯が生まれ、秩序が生まれ、よい社会ができる。宗教に、いけないところは一つもない。

だから、どんな社会にも、宗教はあります。そして、古くからあります。宗教は、哲学や道徳の役目もかねていて、人びとのよい生き方をまるごと提案するものなんですね。

そしてときどき、新しい宗教も出てきます。するとそれが、人びとのあいだを伝わって、広まるかもしれない。この点でも、ウイルスと似ているんです。

だから、宗教はウイルスみたいなものです。ウイルスは、必ず悪さをするとは限らないでしょう？ たいていはおとなしい。宗教も同じで、たいていの宗教は害がない。

カルトは病原性が高い

さて、ウイルスのなかに、病原性の高いものがあります。病原性の高いウイルスは、感染してしまつと、当人や周囲のひとによくはない状況を引き起こす。宗教のなかにも、病原性が高くて、よからぬ状況を引き起こすものがあるんです。これがカルトです。

*

「よからぬ状況」とは何か。実生活に害を及ぼすことです。

人びとは生きていくため、社会生活を営んでいます。家族を営み、働き、生活を維持するためのさまざまな活動をします。

宗教は、こうした人びとの実生活と調和しているのがふつうです。宗教を信じたからといって、実生活が送れなくなったりしない。これがノーマルな宗教です。宗教と社会は共存している。宗教は社会の一部なのです。

ところが、カルトは違います。カルトは、自分たちの宗教さえあればいい。実生活には価値がなく、存在しなくてもいい、と言います。だから、実生活を送る人びとのあいだにトラブルを起こすのです。